

尾瀬の維管束植物目録の見直し



1. はじめに

尾瀬の維管束植物（シダ植物と種子植物…以下「植物」という）の目録は、第1次尾瀬総合学術調査（1950～1952年）時に東京大学の原寛博士と水島正美博士により作成されたものです（Hara and Mizushima, 1954）。この目録は、基本的に証拠標本に基づいて693種類（676種2亜種11変種4雑種）の植物が掲載されています。その後第2次尾瀬総合学術調査（1977～1979年）で、この目録に追加する植物のリストが発表されました（Hara, 1982）。一方、尾瀬の植物相は高い関心を集め、報告書や地方出版物などの中でいくつかの植物目録が発表されました。しかし、これらの目録には①必ずしも標本を根拠とはせず、掲載された種類の再検討ができないものが多い、②採用された分類上の単位が目録によって異なる、③作成された年代が異なり、分類学的な見解もその間に変化している、ため単純な対比や検討ができません。

そこで、第4次尾瀬総合学術調査（2017～2019年）では、過去に尾瀬で採集され博物館や大学の標本庫に収蔵された標本の再検討と、現地調査における採取品をもとに、尾瀬の植物目録を作成しました。

植物の分類体系や、ある植物の分類学的な取扱

（分離・統合など）は、時とともに変化していきます。たとえば1990年代頃まで主流だった被子植物を単子葉類と双子葉類に分ける分類体系から、現在ではDNAの塩基配列を根拠とした分子系統学に基づく分類（APG分類やPPG分類）が主流になっています。図鑑もこれらに対応したものが近年相次いで出版されています。今回の植物目録の改訂は、過去の記録を現在の分類学的な見解と分類体系に合わせて見直すという、もう一つの大きな目的がありました。

2. 初記録の植物など

第4次尾瀬総合学術調査で尾瀬（尾瀬ヶ原と尾瀬沼を囲む稜線と三条ノ滝の内側）から記録された、過去の尾瀬総合学術調査に記録のない植物は197種類（163種4亜種20変種10雑種）で、このうち63種類（46種2亜種10変種5雑種）が尾瀬初記録となる植物です。今回初記録となった植物の中には2017年に新種として発表されたミヤマトキソウも含まれます。同様にフタマタアザミも2011年になって新種として発表された植物です。現地調査の結果、池塘の底から見いだされたシズイ、至仏山から採集されたチチッパペンケイとハナチダケサシなどのほか、過去の尾瀬産標本が見つかったヒメミ

大森 威宏（群馬県立自然史博物館）

クリ、ウラジロナナカマドなどが尾瀬初記録になりました。尾瀬関係者の間では古くから知られていたヤドリギも正式な記録は今回が初めてです。このほかリンネソウやイケマ、そして意外なところではハクサンコザクラなども過去の尾瀬総合学術調査では記録がなく、植物誌などの地方出版物の目録のみから記録がありました。第4次尾瀬総合学術調査では証拠標本も確認できました。

第4次尾瀬総合学術調査や直近の調査記録で植物の種類数が増えることはうれしいことばかりではありません。たとえば大森（2019）によって初めて記録されたヨーロッパ原産のコテンクワガタ（**図1**）は、在来種のテングクワガタと交雑して



図1. 外来種コテンクワガタ

純粋なテングクワガタを減少させ、深刻な影響を与えています。ブタナ、ハイコヌカグサなどの国外外来種（帰化植物）やヒメキンミズヒキ、コウゾリナなどの国内外来種も相次いで尾瀬から記録されるようになってきました。

3. 分類の取扱が変わった植物

ミクニサイシンは第1次尾瀬総合学術調査時にはウスバサイシンとされた植物です。2007年にウスバサイシンが4種に分けられた際に新種として発表されたものの1つで、越後山地と尾瀬に固有です。またヤナギランを2つの亜種に分けた結果、尾瀬など本州中部のものは、北東北以北の狭義ヤナギランとは別亜種のウスゲヤナギランとされました。一方、尾瀬の名をもつオゼトリカブト、オゼタイゲキは現在オクトリカブト、ハクサンタイゲキと同じものとされています。さらに、ジョウシュウアズマギクは、最新の『改訂新版 日本の野生植物1』5（大橋ほか編（2015、2017年））ではミヤマアズマギクの項目の中で「谷川岳、至仏山などの蛇紋岩地にはジョウシュウアズマギクが区別されることがある」と記述されるにとどまっています。

ホシクサ科や、タヌキモ科水生タヌキモ属、キク科ニガナ属は近年大きく見解が変わりました。尾瀬固有とされたユキイヌノヒゲ(図2)は、『改訂新版 日本の野生植物』ではクロイヌノヒゲモドキとともにイヌノヒゲに統合されました。また、アヤメ平にも分布するノソリホシクサは、北海道に分布する



図2. 尾瀬固有種「ユキイヌノヒゲ」とされてきたイヌノヒゲ

クシロホシクサに含められました。なお、第1次尾瀬総合学術調査で記録されたイトイヌノヒゲはすべてイヌノヒゲに同定されました。尾瀬の水生タヌキモ属は、コタヌキモが古くから記録されてきましたが、捕虫囊の吸収毛の形などからヤチコタヌキモとして扱うことが妥当と考えられます。このほかイヌタヌキモとヒメタヌキモも尾瀬から確認されています。尾瀬のニガナ類は従来ハナニガナとクモマニガナ、さらに群馬県内の文献で、至仏山から記録されたタカネニガナです。このうち北東北にみられるクモマニガナの形態に合致する植物は尾瀬からは確認できず、クモマニガナとされたものは、ハナニガナと近年再認識されたシラネニガナです。このほか、オゼニガナも近年亜種として再認識されています。

4. まとめ・今後の課題

第4次尾瀬総合学術調査では893種類（834種7亜種34変種18雑種）の植物が尾瀬から記録され、仮目録としてまとめられました。より軽微な変異に基づく、品種まで含めた既存の植物目録でも900〜1,000種類程度を記録しているため、変種以上及び雑種として認識される尾瀬産植物の種類数としては妥当性があると思われます。一方、過去の尾瀬総合学術調査の目録に記録がありながら標本が確認できない植物が9種、同定に疑問があるか、標本ラベルから尾瀬の稜線外で採集したものを目録に入れた疑いが強い植物が10種あります。今回記録した植物の中でも、キンポウゲ科トリカブト属、キク科ニガナ属、コウモリソウ属などは尾瀬の中でも中間型の存在など分類学的に未解決の問題も多く、今後の研究が期待されます。

一方、近年記録された植物の中には、ショウブ、コウキクサ、クサヨシのように移入と考えられるものの断定しきれないものが増加しています。今後新たな人里の植物の侵入は予想され、ニホンジカの食害により近年減少した植物とともに、新たな侵入種やその疑いのある植物の動向はモニタリングにより注視していく必要があります。

引用文献

1) Hara, H. and H. Mizushima (1954) List of vascular plants of the Ozegahara Moor and its surrounding districts. Ozegahara, Scientific Researchers of the Ozegahara Moor. 428-479, Japan Society for the Promotion of Science,

Tokyo.

2) Hara, H. (1982) Vascular plants of the Ozegahara moor and its surrounding district. Ozegahara. Scientific Researches of the Highmoor in Central Japan (Hara, H. et al. eds.): 123-135. Japan Society for the Promotion Science, Tokyo.

3) 大橋広ほか (編) (2015-2017) 改訂新版 日本の野生植物 1-5. 平凡社, 東京.

4) 大森威宏 (2019) 尾瀬の植物分類学的研究 尾瀬のテングクワガタ *Veronica serpyllifolia* L. subsp. *humifusa* (Dicks.) Syme ex Sowerby & コテングクワガタ *Veronica serpyllifolia* L. subsp. *serpyllifolia* の分布と亜種間交雑の可能性 (予報)・尾瀬の自然保護 (41) : 29-32.

本文の詳しい内容は、低温科学第80巻175-223にも掲載しています。